第２講　共通テスト追試験　第３問

第３問

次の文章は、『蜻蛉（かげろう）日記』の一節である。療養先の山寺で母が死去し、作者はひどく嘆き悲しんだ。以下は、その後の場面から始まる。これを読んで、後の問い（問１〜５）に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 〜 6 の番号を付してある。（配点　50）

1 かくて、とかう(注1)ものすることなど、いたつく(注2)人多くて、(ア)みなしはててつ。いまはいとあはれなる山寺に集ひて、つれづれとあり。夜、目もあはぬままに、嘆き明かしつつ、山づらを見れば、霧はげに麓（ふもと）をこめたり。京もげに誰（た）がもとへかは出（い）でむとすらむ、いで、なほここながら死なむと思へど、生くる(注3)人ぞいとつらきや。

2 かくて十余日になりぬ。僧ども念仏のひまに物語するを聞けば、「この亡くなりぬる人の、あらはに見ゆるところなむある。さて、近く寄れば、消え失せぬなり。遠うては見ゆなり」「いづれの国とかや」「みみらくの島となむいふなる」など、口々

メモ欄

語るを聞くに、いと知らまほしう、悲しうおぼえて、かくぞいはるる。

　ありとだによそにても見む名にし負はばわれに聞かせよみみらくの島

といふを、兄人(せうと)なる人聞きて、それも泣く泣く、

　いづことか音にのみ聞くみみらくの島がくれにし人をたづねむ

3 かくてあるほどに、立ち(注4)ながらものして、日々にとふめれど、ただいまは何心もなきに、穢(けが)らひの心もとなきこと、おぼつかなきことなど、むつかしきまで書きつづけてあれど、ものおぼえざりしほどのことなればにや、おぼえず。

4 里にも急がねど、心にしまかせねば、今日、みな出で立つ日になりぬ。来し時は、膝に臥(ふ)し給(たま)へりし人を、いかでか安らかにと思ひつつ、わが身は汗になりつつ、さりともと思ふ心そひて、頼もしかりき。此度(こたみ)は、いと安らかにて、あさましきまでくつろかに乗られたるにも、道すがらいみじう悲し。

5 降りて見るにも、(イ)<u>さらにものおぼえず</u>悲し。もろともに出で居つつ、つくろはせし草なども、わづらひしよりはじめて、うち捨てたりければ、生ひこりていろい

メモ欄

ろに咲き乱れたり。わざとのことなども[注5]、みなおのがとりどりすれば、我はただつれづれとながめをのみして、「ひとむらすすき虫の音（ね）の」とのみぞいはるる。

　手ふれねど花はさかりになりにけりとどめおきける露にかかりて

などぞおぼゆる。

6 これかれぞ[注6]殿上などもせねば、穢らひもひとつにしなしためれば、おのがじしひき局（つぼね）[注7]などしつつあめる中に、我のみぞ紛るることなくて、夜は念仏の声聞きはじむるより、やがて泣きのみ明かさる。四十九日（しじふくにち）[注8]のこと、誰（たれ）も欠くことなくて、家にてぞする。わが知る人[注9]、おほかたのことを行ひためれば、人々多くさしあひたり。わが心ざしをば、仏をぞ描（か）かせたる。その日過ぎぬれば、みなおのがじし行きあかれぬ。ましてわが心地は心細うなりまさりて、いとどやるかたなく、人[注10]はかう心細げなるを思ひて、ありしよりはしげう通ふ。

（注）１　とかうものすることなど —— 葬式やその後始末など。
　　２　いたつく —— 世話をする。
　　３　生くる人 —— 作者を死なせないようにしている人。

メモ欄

4　立ちながらものして —— 作者の夫である藤原兼家が、立ったまま面会しようとしたということ。立ったままであれば、死の穢れ（けが）れに触れないと考えられていた。
5　わざとのこと —— 特別に行う供養。
6　これかれぞ殿上などもせねば、穢らひもひとつにしなしためれば —— 殿上人もいないので、皆が同じ場所に籠もって喪に服したことを指す。殿上で働く人には、服喪に関わる謹慎期間をめぐってさまざまな制約があった。
7　ひき局 —— 屏風（びょうぶ）などで仕切りをして一時的に作る個人スペース。
8　四十九日のこと —— 人の死後四十九日目に行う、死者を供養するための大きな法事。
9　わが知る人 —— 作者の夫、兼家。
10　人 —— 兼家。

メモ欄

問１　傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［１］・［２］。

(ア)　みなしはてつ　［１］

①　皆が疲れ果てた
②　すべて済ませた
③　一通り体裁を整えた
④　見届け終わった
⑤　悲しみつくした

(イ)　さらにものおぼえず　［２］

①　少しもたとえようがないくらい
②　これ以上は考えられないくらい
③　再び思い出したくないくらい
④　もはや何も感じないくらい
⑤　全く何もわからないくらい

問２　2 段落、3 段落の内容に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は 3 ・ 4 。

① 僧たちが念仏の合間に雑談しているのを聞いて、その不真面目な態度に作者は悲しくなった。

② 作者は「みみらくの島」のことを聞いても半信半疑で、知っているなら詳しく教えてほしいと兄に頼んだ。

③ 「みみらくの島」のことを聞いた作者の兄は、その島の場所がわかるなら母を訪ねて行きたいと詠んだ。

④ 作者は、今は心の余裕もなく死の穢れのこともあるため、兼家にいつ会えるかはっきりしないと伝えた。

⑤ 兼家は、母を亡くした作者に対して、はじめは気遣っていたが、だんだんといい加減な態度になっていった。

⑥ 作者は、母を亡くして呆然（ぼうぜん）とする余り、兼家から手紙を受け取っても、かえってわずらわしく思った。

問3　[4]段落に記された作者の心中についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は[5]。

① 自宅には帰りたくないと思っていたので、人々に連れられて山寺を去ることを不本意に思っていた。
② 山寺に向かったときの車の中では、母の不安をなんとか和らげようと、母の気を紛らすことに必死だった。
③ 山寺へ向かう途中、母の死を予感して冷や汗をかいていたが、それを母に悟られないように注意していた。
④ 山寺に到着するときまでは、祈禱(きとう)を受ければ母は必ず回復するに違いないと、僧たちを心強く思っていた。
⑤ 帰りの車の中では、介抱する苦労がなくなったために、かえって母がいないことを強く感じてしまった。

問4　5　段落の二重傍線部「ひとむらすすき虫の音の」は、『古今和歌集』の、ある和歌の一部を引用した表現である。その和歌と詞書（ことばがき）（和歌の前書き）は、次の【資料】の通りである。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

藤原利基朝臣（としもとのあそん）(注1)の右近中将にて住み侍（はべ）りける曹司（ざうし）(注2)の、身まかりてのち、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけてものよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前栽もいと繁く荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

御春有助（みはるのありすけ）(注3)

君が植ゑしひとむらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな

（注）1　藤原利基朝臣――平安時代前期の貴族。

2　曹司――邸宅の一画にある、貴人の子弟が住む部屋。

3　御春有助――平安時代前期の歌人。

（i）【資料】の詞書の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「人も住まずなりにける」の「なり」は伝聞を表し、誰も住まないと聞いたという意味である。
② 「見入れければ」は思わず見とれてしまったところという意味である。
③ 「前栽」は庭を囲むように造った垣根のことである。
④ 「はやく」は時の経過に対する驚きを表している。
⑤ 「そこに侍りければ」は有助が利基に仕えていたことを示す。

(ii)　【資料】および［5］段落についての説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［7］。

①　［5］段落の二重傍線部は、親しかった人が残した植物の変化を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では利基の死後は誰も住まなくなった曹司の庭の様子が詠まれているのに対して、［5］段落では母が亡くなる直前まで手入れをしていたおかげで色とりどりに花が咲いている様子が表現されている。

②　［5］段落の二重傍線部は、親しかった人が残した植物の変化を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では荒れ果てた庭のさびしさが「虫の音」によって強調されているのに対して、［5］段落では自由に咲き乱れている草花のたくましさが「手ふれねど」によって強調されている。

③　［5］段落の二重傍線部は、親しかった人が残した庭の様子を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では虫の美しい鳴き声を利基に聴かせたいという思いが詠まれているのに対して、［5］段落では母の形見として咲いている花をいつまでも残しておきたいという願望が詠まれている。

④　［5］段落の二重傍線部は、手入れする人のいなくなった庭の様子を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では野原のように荒れた庭を前にしたもの悲しさが詠まれているのに対して、［5］段落では悲しみの中にも亡き母が生前に注いだ愛情のおかげで花が咲きほこっていることへの感慨が表現されている。

⑤　［5］段落の二重傍線部は、手入れする人のいなくなった庭の様子を描く【資料】と共通しているために思い起こされたものだが、【資料】では利基が植えた草花がすっかり枯れてすすきだけになったことへの落胆が詠まれているのに対して、［5］段落では母の世話がないにもかかわらずまだ花が庭に咲き残っていることへの安堵（あんど）が表現されている。

問5 6 段落では、作者の孤独が描かれているが、その表現についての説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
解答番号は 8 。

① 推定・婉曲を表す「めり」が繰り返し用いられることで、周囲の人々の様子をどこか距離を置いて見ている作者のあり方が表現されている。

② 「おのがじし」の描写の後に、「我」「わが」と繰り返し作者の状況が対比されることで、作者の理解されない悲しみが表現されている。

③ 「仏をぞ描かせたる」には、心を閉ざした作者を慰めるために兼家が仏の姿を描いてくれたことへの感謝の気持ちが、係り結びを用いて強調されている。

④ 「いとどやるかたなく」からは、母を失った悲しみのほかに、親族が法要後に去って心細さまで加わった、作者の晴れない気持ちが読み取れる。

⑤ 「人はかう心細げなるを思ひて」からは、悲しみに暮れる作者に寄り添ってくれる存在として、作者が兼家を認識していることがうかがわれる。

■ 共通テスト追試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第３問（50）	1	1	2	5
		2	5	5
	2	3 − 4	3 − 6	12（各6）
	3	5	5	7
	4	6	5	6
		7	4	8
	5	8	3	7

（注）
−（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。